

聴覚障がい学生支援における一考察

A Study of Support System for the Students with Hearing Disability in Higher Education Institution

○ 早稲田大学人間科学学術院	畠山 卓朗
国立障害者リハビリ学院 ST 学科	志磨村 早紀
筑波大学大学院人間総合科学研究科	杉中 拓央
日本福祉大学健康科学部	渡辺 崇史
国立特別支援教育総合研究所	土井 幸輝

キーワード：聴覚障がい，高等教育，情報保障，支援技術

1. 取り組みの背景

大学などの高等教育機関では聴覚に障がいがある学生（以下では，単に障がい学生とする）にたいして講義中の情報保障として，講師の講義内容を文字化して障がい学生に提示するなど，いわゆるノートテイク支援が行われている．大学側からは，講義を開始する前に，担当教員にたいして講義中にはどのような配慮が必要かを示した文書が伝達される．そのおもな内容は障がい学生にたいしていかに正確にもれなく情報を伝えるかである．しかし，実際に講義を始めて見ると，そこには様々な改善課題が横たわっていることが見えてきた．

本稿では，ゼミに障がい学生を受け入れ，その学生を中心としてゼミ全体で様々な試行錯誤をしていく課程で明らかになった事柄について報告する．

2. 問題意識

通常，講義やゼミでの情報保障とは「講師の話していることを可能な限り洩らすことなく障がい学生に伝達すること」と捉えられているように思われる．

しかし，障がいをとくに持たない学生に置き換えると果たしてどうであろうか．授業に参加するということは，講師の講義内容はもちろんではあるが，教室の静かさやざわめき，共に授業を受けている学友とのやりとり，講師に質問する学生の表情など，様々な学習環境に取り囲まれた中で授業を受けている．一方，現状での障がい学生が置かれている状況

はというと，講義室の最前列で2名の支援者に挟まれながら，あたかも特別扱いのように授業を受けている実態がある．このような状況は障がい学生だけでなく，講義を行っている筆者にとっての大きな違和感となった．果たして，「情報保障」とは，講義内容の一方的な情報保障のみで良いのであろうか．近年，これら以外にも，支援をする学生と受ける学生の双方，さらにそれらの関係性において様々な改善すべき課題があることが明確になっている¹⁾²⁾．

3. 支援における試行錯誤

3.1 ゼミにおける机配置の検討

これまで筆者は，10数名が参加するゼミ（学部3年生対象）では六角形の机配置をとってきた，教員およびゼミ生全員が他者の顔を見渡しやすくすることがその理由である．

障がい学生がゼミに配属されたのを契機として，それを見直す必要性が生じた．障がい学生（重度難聴，右：ろう，左90db，至近距離では口話による読み取り可）の着座位置に関して，当初は教員の顔を見やすい真正面の位置に座席を決めた．しかし，これでは教員のみならず他の学生との距離がありすぎることがわかった．障がい学生が中心となり，ゼミ生が協力しながら手始めに長方形の机配置を試し，最終的には教員だけではなく他のゼミ生との距離感なども考慮に入れ，図1に示すようなほぼ台形の配置をとることとした．【授業への参加一体感】

3.2 補聴システムの試用

障がい学生が使用している補聴器に他者が話している音声情報を効果的に伝えるため、3本のマイクを用意し、他の学生が発言する際は、マイクを使用するようにした。障がい学生は、当初はこの補聴システムを受け入れようと努力したが、やがて使用すること自体聴覚的に違和感が生じ、最終的には使用しないことにした。【選択の自由】

3.3 支援学生との位置的関係を見直す

聴覚障がいがある学生の情報支援では、通常1名の障がい学生にたいして2名の支援者がつく。当初、障がい学生の両脇を2名の支援者が固めたが、ゼミの中での特別な存在としての見え方にたいする違和感が本人の中で生じた。そこで、常時横にいる支援者は1名として、もう一人の支援者は少し離れた位置で待機するという体制をとった(図1)。2コマ連続の演習ゼミでは最終的には1名の支援者が最初のコマを担当し、次のコマではもう一人の支援者が担当するようにした。【特別な存在からの離脱】

4. 新たな支援技術の導入

筆者らは昨年のカンファレンスにおいて手書きノートテイク支援システム³⁾を報告した。デジタルペンを利用した支援の導入により、障がい学生と支援者間の距離を離すことが可能になり、障がい学生が他の学生と一体感を保ちながら講義やゼミに参加できるようになる。図2は、講義中のグループワーク作業に手書きノートテイク支援システムを試験運用している様子である。障がい学生はグループの輪の中に入り、支援者は少し離れたところに位置している。

5. 今後に向けて

更なる解決すべき課題として、教場を飛び出しての屋外でのフィールドワーク場面、卒業後の職場、さらには日々の暮らしの中での情報保障など、様々な課題が山積していると考え、今後とも引き続き検討を行う。

謝辞

様々な場面で協力してくださいました支援学生の皆様、ゼミ生、早稲田大学障がい学生支援室スタッ

フに深く感謝いたします。

なお、本研究の一部は文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業の助成を受けて行われた。

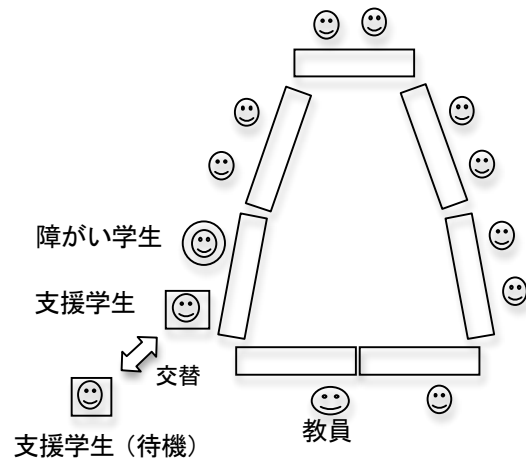


図1 ゼミにおける机配置と着座位置



図2 ノートテイク支援システム³⁾を使用したグループワーク場面
障がい学生は後列左から二人目、支援者は前列右端

参考文献

- 1) 杉中拓央・他：聴覚障害学生の講義参加と環境因の関係，第26回リハ工学カンファレンス講演論文集，pp. 185-186，2011
- 2) 志磨村早紀・他：聴覚障害学生支援における支援者と被支援者の心理的なギャップに関する研究，日本福祉のまちづくり学会第14回全国大会，予稿集CD-ROMに掲載，2011
- 3) 畠山卓朗・他：聴覚障がい学生の主体的な講義参加を可能にする手書きノートテイクシステム，第26回リハ工学カンファレンス講演論文集，第26回リハ工学カンファレンス講演論文集，pp. 63-64，2011